研究論文

〈順百首〉の表現摂取 ―先行歌集・歌合との関わりと『古今和歌六帖』―

福田智子

〈順百首〉には、『万葉集』や『古今和歌集』『後撰和歌集』の語句を用いた歌が散見される。その一方で、『亭子院女郎花合』や『亭子院歌合』『近江御息所歌合』といった宇多・醍醐朝の歌合の歌で、それまでの勅撰集などに再録されていない歌に、表現を依拠した例も見出される。これは源順が、それらの歌合を記した資料に接する機会を得ていたひとつの証になるであろう。

これらの歌合の歌は、類題和歌集『古今和歌六帖』にも、少数ながら収められている。中には、歌合の番外歌、あるいは撰外歌と判断される歌もある。歌合資料をめぐる〈順百首〉と『古今和歌六帖』のこのような共通性は、十世紀後半における歌合資料の流布状況を探る上で、膨大な和歌資料流布の一面を垣間見る、有効な視点となり得る。

一

源順は、『後撰集』の編纂と『万葉集』の訓点作業を行った梨壺の五人の一人として、当代を代表する歌人である。順には、天徳年間の末（九六〇年）頃に詠まれた〈好忠百首〉の「かへし」として作った百首歌があり、『順集』には載らないものの、『好忠集』中にその歌を見出すことができる。その百首歌の中に、次のような一首がある。

夏十

よはをわけはるくれ夏はきにけらしとおもふまなくかはるころもで

〈順百首〉一一番（『好忠集』四九五番）[1]

この歌が、次の持統天皇歌を踏まえて詠まれていることは、「天の香具山」という歌枕が用いられていないとしても、明らかであろう。

天皇御製歌

春過ぎて夏来良之（夏来るらし）白たへの衣干したり天の香具山

『万葉集』巻第一、二八（二八）番[2]

いやむしろ、「天の香具山」を用いずに持統天皇歌を踏まえるところに、順の作歌の工夫があるようにも思える。

後の『新古今集』に採られ、『百人一首』にも撰ばれることになるこの歌に着目したのは、おそらく、順がごくはじめだったのではないだろうか。また、持統天皇歌の第二句は、「夏来るらし」と「夏来にけらし」という対立した訓をもつことは広く知られているが、順が、『新古今集』と同じ「夏来にけらし」[3]という本文でこの歌を享受していたらしい点も見逃せない。

このように、順は、百首歌詠作にあたり、かつて深く向き合ったであろう『万葉集』の歌を踏まえている。また、『古今集』や、自身が撰者として関与した『後撰集』を素材とした歌もある。国家的和歌事業に関与した順の立場から推せば、さらに幅広い作歌素材を目にしたであろうことも、想像に難くない。そこで、本稿では、〈順百首〉について、先行歌の表現摂取の様相を、具体的に考察していきたい。

二

〈順百首〉における万葉歌摂取は、冒頭の一一番歌を除くと、一、二句の歌句をそのまま借用した例が目立つ。

（恋十）

かつまたのいけのうらなみうちはへてたちてもゐてもものをこそおもへ　〈順百首〉四二番（『好忠集』五二六番）

右の例では、「たちてもゐても」という句が、『万葉集』に六例（西本願寺本の訓）、集中して見える。たとえば、

大宰帥大伴卿被レ任二大納言一臨二入レ京之時一府官人等餞二卿筑前国蘆城駅家一歌四首

み崎みのありそに寄するいほへ波立ちても居てもあが思へる君

右の一首、筑前掾門部連石足

『万葉集』巻第四、五六八（五七一）番

春柳葛城山に立つ雲の立ちても居ても妹をしぞ思ふ

『万葉集』巻第十一、二四五三（二四五七）番

といった例である。この句は、平安期においてはほとんどなく、かろうじて次の『人丸集』歌が指摘されるのみである。

青柳のかづらき山にゐる雲のたちてもゐても君をこそおもへ

『人丸集』一八二番

だがこれも、先の『万葉集』歌を採録したものであるので[4]、平安期の用例としては、〈順百首〉が唯一例と見なされよう。初句「かつまたの池」も、『万葉集』巻第十六、三八五七（三八三五）番歌にあるところから推すと、〈順百首〉の当該歌は、平安中期にあって、万葉色の濃い一首

と受け取られていたであろう。

次の歌では、「はちすばにたまれる（露）」という表現に着目してみよう。一見何の変哲もないが、平安期には他例がない。

（これはあさかやまになにはつ）

るりのつぼささらゐさきははちすばにたまれる露にさもにたるかな

〈順百首〉六一番（『好忠集』五四五番）

この歌句は、万葉歌に二首の用例が見出されるが、『新編国歌大観』による限り、万葉歌の重出を除けば、江戸期まで他例のないものである。

みはかしを　剣の池の　蓮葉に　たまれる水の　行くへなみ……

『万葉集』巻第十三、三二八九（三三〇三）番

ひさかたの雨も降らぬか蓮葉にたまれる水の玉ににたる見む

右歌一首伝云、有二右兵衛一姓名未レ詳、多二能歌作之芸一也、于レ時府家備二設酒食一饗二宴府官人等一、於レ是饌食盛レ之皆用二荷葉一、諸人酒酣歌儛駱駅、乃誘二兵衛一云、開二其荷葉一而作二此歌一者、登時応レ声作二斯歌一也

『万葉集』巻第十六、三八三七（三八五九）番

なお、後者は、『古今六帖』三七九一番（歌題「はちす」作者「やかもち」）にも載っている。先の「たちてもゐても」の例とあわせて、万葉歌の表現として押さえておくべきだろう。

さらに、〈順百首〉が初句・第二句を万葉歌に依拠する例がある。

（これはあさかやまになにはつ）

かくこひんものとしりせばひとめ見る人にこころをつくる身なれば

〈順百首〉七九番（『好忠集』五六三番）

「かくこひんものとしりせば」という、常套句ともとれる表現は、しかし、平安期にはほぼ用いられず、万葉歌に二例存する。

かく恋ひむものと知りせばゆふへ置きてあしたはけぬる露ならましを

『万葉集』巻第十二、三〇三八（三〇五二）番

かく恋ひむものと知りせばわぎもこに言問はましを今し悔しも

『万葉集』巻第十二、三一四三（三一五七）番

ただし、注目すべきは、次の『古今六帖』の出典未詳歌であろう。

（ゆみ）　人丸

かくこひんものとしりせばあづさゆみするゐのなかごろあひみてましを

『古今和歌六帖』第五、三四二五番

この歌を人丸の作とする根拠は、未だ管見に入らないが、初句・第二句から万葉らしさを読み取ることは許されよう。

以上のように、〈順百首〉には、万葉歌独特の表現をそのまま採り入れた歌が見出される。だが万葉の表現は、『古今集』に継承され、その後、用例が途絶える場合もある。それを〈順百首〉が享受した例を挙げ

よう。

恋十

いろにいでば人しりぬべみをだえだのぬまよりもけにうへぞつれなき　〈順百首〉四〇番（『好忠集』五二四番）

初句・第二句の「いろにいでば人しりぬべみ」という表現は、まず、次の万葉の長歌に見出される。そしてさらに、『古今集』雑体にも存するのである。

天平元年己巳冬十二月歌一首并短歌

（略）　見るごとに　恋は増されど　色に出でば　人知りぬべみ　冬の夜の　明かしも得ぬを　いも寝ずに　あれはぞ恋ふる　妹がただかに　『万葉集』巻第九、一七八七（一七九一）番

短歌

題しらず　よみ人しらず

（略）あしひきの　山した水の　こがくれて　たぎつ心を　たれにかも　あひかたらはむ　いろにいでば　人しりぬべみ　すみぞめの　ゆふべになれば　ひとりぬて　あはれあはれと　なげきあまり　せむすべなみに　にはにいでて　たちやすらへば　しろたへの　衣のそでに　おくつゆの　けなばけぬべく　おもへども　なほなげかれぬ　はるがすみ　よそにも人に　あはむとおもへば　『古今集』巻第十九雑体、一〇〇一番

この『古今集』歌は、後に、『古今和歌六帖』第四、二五〇四番にも収められる。この表現継承の細い流れの中に、〈順百首〉歌も位置づけられよう。

三

〈順百首〉と『古今集』との表現上の関わりには、先の『万葉集』の多くの場合のように、本歌から一、二句をそのまま借りる例もある。

（これはあさかやまになにはつ）

かやり火のしたにもえつつあやめ草あやめもしらぬこひのかなしき　〈順百首〉五五番（『好忠集』五三九番）

たとえば、右の〈順百首〉五五番歌では、傍線部分から、『古今集』恋一の巻頭歌を思い浮かべない人はいないだろう。

題しらず　読人しらず

郭公なくやさ月のあやめぐさあやめもしらぬこひもするかな　『古今集』巻第一恋歌一、四六九番

冒頭に触れた持統天皇歌を踏まえた際に、印象深い「天のかぐ山」という地名をあえて避けたかに見えたのとは対照的とも言える、本歌の特徴的な句、そのままの利用と言えるだろう。

また、次の歌では、上句の表現を『古今集』歌に拠っている。

（これはあさかやまになにはつ）

さはだがはせぜのむもれぎあらはれてはなさきにけりはるのしるしに　〈順百首〉五一番（『好忠集』五三五番）

（題しらず　よみ人しらず）

名とり河せぜのむもれ木あらはれば如何にせむとかあひ見そめけむ　『古今集』巻第十三恋歌三、六五〇番

「せぜのむもれぎ」という句は、平安中期には他例がなく、鎌倉期から急増する。この点で、〈順百首〉は、中世和歌の表現を先取りした感もある。

さらに、〈順百首〉五〇番に見える「あさましやあさかのぬまの」という同音反復は、『古今集』歌をもとに発想した可能性があろう。

これはあさかやまになにはつ

あさましやあさかのぬまのさくらばなかすみこめてもみせずもあるかな　〈順百首〉五〇番（『好忠集』五三四番）

「あさましや」と「あさ」から始まる句の組み合わせは、平安中期までの用例としては、実はそれほど多くない。次の『古今集』歌がおそらく最も早い例だろう。

（題しらず）　なかき

雲はれぬあさまの山のあさましや人の心を見てこそやまめ　『古今集』巻第十九雑体、一〇五〇番

その後、他ならぬ順の家集に載る双六番の歌や、『古今六帖』の出典未詳歌に、用例が見える程度である。

（双六番のうた、これもありただがよみはじめたるに、よみつぐ）

しなのなるあさまのたけのあさましやおもひくまなききみにもあるかな　『源順集』一〇七番

（山）

うらみてもしるしなけれどしなのなるあさまの山のあさましや君　『古今和歌六帖』第二「山」、八九三番

これらの歌は、いずれも「あさまの山（たけ）の　あさましや」という七音句・五音句という型をもつ。だが、〈順百首〉五〇番は、「あさかやまなにはづ」の沓冠歌の一首目であり、初句を「あ」から始めなければならない。そこで、この表現を初句と第二句に利用するために、「あさましや　あさかの……」と句を入れ替える必要が生じたのだろう。

以上のように、〈順百首〉には、『古今集』歌を句単位で利用した歌作りをする例が存する一方で、一首全体の骨組みを下敷きにした歌も見受けられる。

かのえ

はなのかのえだにしとまるものならばくるるはるをもをしまざらま

し　〈順百首〉八七番（『好忠集』五七一番）

この歌では、傍線部分がすべて、次の『古今集』歌と一致する。

（題しらず）　典侍洽子朝臣

ちる花のなくにしとまる物ならば我鶯におとらましやは

『古今集』巻第二春歌下、一〇七番

〈順百首〉は、表現の骨格だけではなく、花を素材として惜春の情を詠む点でも『古今集』歌に共通するが、『古今集』の散る花に対し、花の香に焦点を移すところに、新たな作歌の可能性を求めたと推察される。物名題「かのえ」について、「香」「枝（えだ）」という語を思い付いたことからくる発想だろう。

また、次は、傍線部分はそのままに、『古今集』歌の季節の春を、冬に移した作である。

冬十

ふゆきぬと人はいへどもあさごほりむすばぬほどはあらじとぞおもふ　〈順百首〉三〇番（『好忠集』五一四番）

はるのはじめのうた　みぶのただみね

春きぬと人はいへどもうぐひすのなかぬかぎりはあらじとぞ思ふ(5)

『古今集』巻第一春歌上、一一番

初句・第二句と結句で構成する一首の型の中に、季節の到来を真っ先に知らせる景物を挿入するという歌作りである。以上二首のような、一首全体を先行歌の構造に拠る〈順百首〉の例は、万葉歌を踏まえる際には、まず見られなかったものであろう。

四

〈順百首〉が拠ったと思われる『後撰集』歌は、意外と少ない。まず、歌全体の骨組みを下敷きにした歌は、一首見出される。

にし

いさやまだこひにしぬてふこともなしわれをやのちのためしにはせん　〈順百首〉九七番（『好忠集』五八一番）

つれなく侍りける人に　ただみね

こひわびてしぬてふことはまだなきを世のためしにもなりぬべきかな

『後撰集』巻第十四恋六、一〇三六番

『後撰集』歌は、自らを、恋に悩んで死に至るという初例になりそうだと詠んでいるが、〈順百首〉では、自らを恋死にの前例にしよう、というのである。「まだ」「こひ」「しぬてふこと」「なし」「ためし」といった語句を共通して用いながら、より意志が読み取れる強い調子に詠み換えられている。

また、上句を『後撰集』歌に依拠した歌としては、左の歌が挙げられよう。

（これはあさかやまになにはつ）
けふよりはなつのころもになるなへにひもさしあへずほととぎすなく
〈順百首〉五六番（『好忠集』五四〇番）

この〈順百首〉五六番歌の上句は、『後撰集』所載の夏部巻頭歌に拠ると思われる。

題しらず　　よみ人も
今日よりは夏の衣に成りぬれどきるひとさへはかはらざりけり
『後撰集』巻第四夏、一四七番

いずれも夏の更衣の日を迎えた歌だが、『後撰集』が第三句を逆接にし、夏の薄い衣になっても人の心は薄情にはならないと詠むのに対し、〈順百首〉は、順接につないで、時鳥によって夏の到来を印象づける。実はこの『後撰集』歌は、『亭子院歌合』四二番の歌で、右方、躬恒の作であり、左方の雅固の歌、「みやまいでてまづはつこゑはほととぎすよぶかくまたむわがやどになけ」と番えられ、左方が勝を収めている。やはり、更衣という季節の変わり目において、変わらない心を詠むより、季節の変化の先にある景物を詠むのが常であるという判断であろうか、〈順百首〉歌では、勝った左方の歌と同じく、夏を告げる時鳥を詠んでいる。その一方で、『後撰集』が当該歌合歌を夏部巻頭歌に配した点については、たとえば、新日本古典文学大系6『後撰和歌集』において、「このように人の心を主体にした歌を夏部の冒頭に置くのは後撰集の特徴。」[6]と指摘されているとおり、きわめて珍しい。

さらに、〈順百首〉七六番は、次のような歌である。

（これはあさかやまになにはつ）
吹く風のたよりにとはんたまだれのみすもうごかばわれとしらめや
〈順百首〉七六番（『好忠集』五六〇番）

傍線部分「吹く風」「たまだれ」に着目すると、次の『後撰集』歌との関連性が浮かび上がってくる。

これかれ女のもとにまかりて物いひなどしけるに、女のあな
さむの風やと申しければ　　よみ人しらず
玉だれのあみめのまよりふく風のさむくはそへていれん思ひを
『後撰集』巻第十六雑二、一一五七番

また、「たまだれのみす」という語句ならば、やはり『後撰集』に、次の用例がある。[7]

（題しらず）　　（よみ人も）
君によりわが身ぞつらき玉だれの見ずは恋しとおもはましやは
『後撰集』巻第九恋一、五六六番

『後撰集』歌では、「みす」は「御簾」と「見ず」との掛詞であるが、〈順百首〉では、とくに技巧はない。

一首の内容からいえば、額田王の万葉歌、

額田王思二近江天皇一作歌一首

君待つとあが恋ひをれば我がやどのすだれ動かし秋の風吹く

『万葉集』巻第四、四八八（四九一）番[8]

を踏まえて、作歌主体を女性から男性に替えた作とも見られよう。すなわち、万葉の額田王の歌をもとに、男性の立場から詠んだ歌と言えそうに思われる。

五

以上、『万葉集』『古今集』『後撰集』の語句、あるいは一首に依拠して詠んだと思しき〈順百首〉歌を考察してきたが、さらに、宇多・醍醐朝の歌合の歌にも、着目していたことがわかる。そこでは、特徴的な語句の借用というよりはむしろ、複数の語句の組み合わせの模倣や、一首全体の骨組みを下敷きにした例が見える。以下、個々の用例を見ていこう。

まず、次の〈順百首〉七一番歌は、主要語句やそれらが用いられる順序まで、『寛平御時后宮歌合』の歌に拠ると思われる。

（これはあさかやまになにはつ）

ひとたびもわりなくものをおもふにはむねもちぢにぞくだくべらなる

〈順百首〉七一番（『好忠集』五五五番）

右

一たびも恋しとおもふにくるしきは心ぞちぢにくだくべらなる

『寛平御時后宮歌合』一五七番

〈順百首〉における歌の配置からすると、七一番は、「ひ」で始まり「る」で終わる沓冠歌でなければならない。その点、右の歌合歌は、偶然この条件に適っており、〈順百首〉では最小限の改変にとどめているように見える。

この歌合歌は、『忠岑集』にも載っている。[9]これを忠岑歌とすると、〈順百首〉においては、現在確認されているだけでも、三〇番・七一番・九七番の三首の歌が、忠岑歌に一首の骨組みが大きく依拠していることになる。〈順百首〉において、忠岑の歌は、ひとつの作歌の手本であったといえよう。

また、〈順百首〉七二番では、『亭子院女郎花合』の歌との語句の共通性が見出せる。この『亭子院女郎花合』の歌もまた、先の『亭子院歌合』九番歌と同様、『新編国歌大観』によっても、他の歌集への採録が見出されない。

（これはあさかやまになにはつ）

ときのまもこころもこころこひしきはのちうきものと人をこそおもへ

〈順百首〉七二番（『好忠集』五五六番）

おほよそになべてをらるなをみなへしのちうきものぞひとのこころは

『亭子院女郎花合』四四番

「のちうきもの」「こころ」「ひと」の組み合わせは、『新編国歌大観』を検する限り、平安中期までの用例としては、右の二例を指摘するのみである。もっとも、「のちうきもの」という語句ならば、『忠岑集』や『後撰集』に用例がある。

これしらでのちうきものはねるとこにわがみをはかるゆめにざりける

『忠岑集』四八番(10)

をとこの返事につかはしける　　俊子

思ふてふ事のはいかになつかしなのちうき物とおもはずもがな

『後撰集』巻第十三恋五、九一九番

ただし、歌合歌は、「ひとのこころ」は「のちうきもの」なので並一通りでは恋してはならないという戒めであるのに対し、〈順百首〉は、恋せずにはいられない自らの「こころ」で、「のちうきもの」とは知りながら「ひと」を慕ってしまうという、いわば先の戒めを受ける側の立場の歌である。語句のみならず、内容の関連性もじゅうぶん認められるであろう。

なお、〈順百首〉の「こころもこころ」という句は用例が稀少で、

また、ひと

うつつにはこころもこころねぬるよのゆめともゆめと人にかたるな

西本願寺本『中務集』一八一番(11)

を挙げるにとどまる。中務も順と同時代人である点が注意されよう。両者の直接的影響関係が窺える。

次に、〈順百首〉九四番歌は、傍線部分が、延喜十三年（九一三）三月十三日に催された『亭子院歌合』の貫之歌と全く一致する。

たつみ

かすみたつみむろのやまにさくはなはひとしれずこそちりぬべらなれ

〈順百首〉九四番（『好忠集』五七八番）

左　　貫之

はるがすみたちしかくせばやまざくらひとしれずこそちりぬべらなれ

『亭子院歌合』九番

『亭子院歌合』は、周知のとおり、『古今集』『後撰集』をはじめとする勅撰集の撰歌材料にもなっている歌合である。だが、右の貫之歌は、勅撰集の他、『貫之集』にも重出を見ない。すると順は、『亭子院歌合』そのものを目にし、詠歌の素材として用いたものと考えられる。なお、〈順百首〉歌に見られる「かすみたつみむろのやま」の発想は、『万葉集』巻第十三、三二四一（三二二七）番の長歌、「……神奈備の　三諸の山(12)は　春されば　春霞立ち　秋行けば　紅にほふ……」からくるものであろう。

そして、〈順百首〉五二番は、「かをとめて」「かくす」「かすみ」という語句の組み合わせから推すと、『近江御息所歌合』一番歌を踏まえたものと考えられる。

（これはあさかやまになにはつ）
かをとめてうぐひすはきぬたなびきてかくすかひなしはるのかすみは　〈順百首〉五二番（『好忠集』五三六番）

宮すどころのざうしにて、宮の花といふうたをあはす、右はあはせず
梅
かをとめてをりこそしつれむめの花春の霞は立ちかくせども　『近江御息所歌合』一番

歌の内容や表現が、歌合歌に拠っていることは明らかであろう。その上で、〈順百首〉が、梅の香を求める主体を人ではなく鶯とした点に、わずかな新味が窺える。

近江御息所は、醍醐天皇の更衣、源周子であり、歌合が催されたのは、天皇存命中のこととすると延長八年（九三〇）以前と推定される。[13]「歌合史上とりたてていう程の影響を後世に及ぼしたものとは考えられない」[14]と言われる歌合ではあるが、周子は、順が仕えた高明の母であり、そういった経路から本歌合を順が手にした可能性があろう。

六

以上、〈順百首〉が、『万葉集』『古今集』『後撰集』と歌合の歌の表現を、どのように採り入れているのか、検討してきた。『万葉集』では、一、二句の歌句の借用にとどまる例が目立つが、『古今集』では、一首全体の骨組みを下敷きにした例も見え、〈順百首〉の作歌の素材として、比較的重視されていたように思われる。『後撰集』になると、指摘できる用例数が少なく、依拠した歌の作者も忠岑やよみ人しらずであって、どこか『古今集』に載らない古今時代歌人の歌の落ち穂拾いをしている感がある。とりわけ、忠岑の歌と〈順百首〉との表現上の関わりは、深いものがあるように思われる。その他の詠歌材料として注意すべきは、宇多・醍醐朝の歌合である。本稿では、『寛平御時后宮歌合』『亭子院女郎花合』『亭子院歌合』『近江御息所歌合』を指摘した。個々の歌は、勅撰集に採録されておらず、勅撰集を経由した享受ができないものである。順にはおそらく、これらの歌合資料を直接見る機会があったのだろう。梨壺の五人としての和歌活動を通しても、その可能性は容易に推し量れることであるが、『近江御息所歌合』に関しては、周子から高明、さらに順へという特別の経路を想定し得る。それらの歌合歌を、順が、単に見知っていただけではなく、万葉歌や勅撰集歌と同様に〈順百首〉詠作の材料として用いていた点は、注目に値すると思われるのである。

ところで、〈順百首〉の表現を通して、順が見たであろう歌合が浮かび上がってきたが、そもそも、順が活躍した十世紀後半、歌合資料は、どの程度流布し、読まれていたのであろうか。最後に、ちょうどこの頃成立したとされる類題和歌集『古今和歌六帖』所収の歌合歌から、その

一端を考察してみよう。

『古今和歌六帖』には、寛平御時后宮歌合から坊城右大臣殿歌合までの、十三の歌合の歌が収められている（別表参照）。前述の『寛平御時后宮歌合』の場合、『古今和歌六帖』には五十四首収められているが、『新撰万葉集』の撰歌材料でもあったため、それとの重複が多く、『古今和歌六帖』が、この歌合から直接歌を採ったかどうかは判然としない。

一方、『亭子院女郎花合』では、『古今和歌六帖』に六首の歌が見えるが、そのうちの一首「やをとめのそでかとぞみるをみなへしきみをいはひてなではじめてき」（四九番）は、歌合以外に出典が指摘できない歌である。わずか一首ではあるが、『古今和歌六帖』が直接歌合から歌を採った可能性は残るであろう。

さらに、『亭子院歌合』では、二十三首の歌が『古今和歌六帖』に収載されるが、そのうち七首という比較的まとまった数の歌について、他出を見ない。さらに注意すべきは、「時鳥のちのさ月もありとてやながくうづきをすぐしてはてつる」という歌が、その中に含まれているということである。この歌は、『新編国歌大観』では、解題に列挙される歌群にある（八番）。「底本（尊経閣文庫蔵十巻本歌合巻一所収本……筆者注）になくて二十巻本にある歌」で、「四月の六番から十番に該当する九首（一首分欠）」がこの歌群である。続けて藤岡忠美氏の解題には、「『平安朝歌合大成』ではこの九首について、『歌合の歌としては撰に入りながら時間の都合によって番いをとめられた番外歌か、若しくは撰外歌であった』かという想定を下している」とある。『平安朝歌合大成』や、その説を受けた『新編国歌大観』解題に従えば、先の解題八番歌も、「番外歌」あるいは「撰外歌」ということになる。すると、『古今和歌六帖』の撰者は、そういった番外・撰外歌も含めた歌合資料を入手できたことになる。後の十巻本歌合ではなく、二十巻本歌合へと伝来する資料と推察されよう。

『近江御息所歌合』に関しては、『古今和歌六帖』には三首入集しており、そのうち一首は『躬恒集』にも酷似する歌が存するが、他の二首は歌合以外に出典と思しき歌集を未だ見出せない。『古今和歌六帖』の編者はやはり、この歌合も手にしていたのであろう。なお、『近江御息所歌合』は、後の『拾遺抄』に一首、題しらずとして歌が載る（巻第一春、三八番）。その後、『拾遺集』で、初めて歌合であることが明記され（巻第一春、六一番）[15]、さらに、今のところ他に出典を見ない二首の歌が加えられる。すると、『拾遺抄』を増補する段階で、歌合資料が用いられたことは、まず疑いあるまい。

このように、〈順百首〉の詠歌材料となった歌合の、『古今和歌六帖』における採歌状況を見てみると、歌合資料をめぐる〈順百首〉と『古今和歌六帖』の視点の共通性を、指摘することができるであろう。『古今和歌六帖』は、『万葉集』『古今集』『後撰集』の歌を多く収めていることで知られているが、歌合資料にも細かな目配りがなされていた。かつて、平井卓郎氏によって、『古今和歌六帖』の編者が順である可能性が提出され[16]、有力な仮説として今日に至っている。本稿では、これ以上想像をたくましくすることは避けるが、十世紀後半における歌合資料の流布状況の中で、その当時、他出のない歌合歌は、用例数は少ないとはいえ、膨大な和歌資料流布の一面を垣間見る、有効な視点となり得る。

註

1 以下、特に断らない限り、和歌の引用は『新編国歌大観』に拠り、適宜傍線を付した。

2 以下、『万葉集』の引用も『新編国歌大観』に拠るが、適宜、表記を改めた箇所がある。また、歌番号は、旧番号（新番号）の順に示す。

3 『万葉集』諸本においても、たとえば、『新編国歌大観』の底本である西本願寺本の訓がこの本文をもつ。

4 『拾遺集』巻第十三、七七九番のよみ人しらず歌も、万葉歌の異伝であろう。

5 この歌は、書陵部蔵御所本丙類『忠岑集』五〇一・一二三）一四番、西本願寺本『忠岑集』五番にも載る。

6 片桐洋一氏校注、岩波書店、一九九〇年四月刊。

7 少しく下れば、『兼澄集』五二番、『高遠集』二七四番・三〇七番、『和泉式部集』二一七番、『和泉式部続集』三六六番・六二五番などの用例もある。

8 『万葉集』巻第八、一六〇六（一六一〇）番にも重出する。

9 書陵部蔵御所本丙類『忠岑集』（五〇一・一二三）四四番、西本願寺本『忠岑集』一〇二番。

10 書陵部蔵御所本丙類忠岑集（五〇一・一二三）。西本願寺本三四番では、「うれしくてのちうきことはぬるごとに（以下同）」とある。

11 書陵部蔵御所本三十六人集（五一〇・一二）所収本、二四五番にも「こと人なるべし、しのぶるに」という詞書で載る。

12 「三諸の山」と「三室の山」とは「神奈備山という名称を介して同一視された」（『歌ことば歌枕大辞典』〈角川書店、平成十一年五月〉「三室山」の項〈石田千尋氏〉）。

13 『平安朝歌合大成』『新編国歌大観』解題ほか。

14 『平安朝歌合大成』史的評価。

15 ただし、片桐洋一氏『拾遺和歌集の研究』校本篇（大学堂書店、昭和四十五年刊）によれば、異本第一系統では題不知歌群中に入る。

16 『古今和歌六帖の研究』第二章　古今和歌六帖の編者とその成立年代　附　源順説（明治書院、昭和三十九年二月）。

附記

本稿は、科学研究費補助金基盤研究（C）「文字列データ解析システムの構築と平安朝文学の伝本と表現に関する総合的研究」（課題番号22500236、平成二十二～二十四年度）における研究の一部である。用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版Ver.2とともに、竹田正幸氏作成の文字列解析器「e-CSA」Ver.2.00を使用した。

歌　合　名	開　催　年　月	主　催　者	総歌数	他出無の歌/採歌数	備　考
寛平御時后宮歌合	寛平四年(892)頃	班子女王 (宇多帝の母后)	193首	0/54 首	
寛平御時中宮歌合	?	班子女王? 胤子(宇多帝女御) ? 温子(宇多帝中宮)?	32首	2/7首	定文合・陽成一に重出１首
亭子院女郎花合	昌泰元年(898)秋	温子	51首	1/6首	
宇多院歌合	延喜五年(905)以前	宇多院	24首	5/5首	寛平中・陽成一に重出１首
左兵衛佐定文歌合	延長元年(923)以前 （旧作を含めた撰歌合?)	(平定文が有力歌人の秀作を集めた)	38首	7/13首	
本院左大臣家歌合	延喜九年(909)以前	藤原時平	20首	1/1首	「解題」の 1 首を含む
亭子院歌合	延喜十三年(913) 三月十三日	宇多院	70首	7/23首	
内裏菊合延喜十三年	延喜十三年(913) 十月十三日	醍醐天皇	14首	4/11首	
保明親王帯刀陣歌合	延喜四年(904)春宮～同二十三年(延長元年)没の間	保明親王 (醍醐天皇東宮)	17首	1/1首	『躬恒集』に重出1首、第三句異同
近江御息所歌合	延長八年(930)以前?	近江御息所 (醍醐帝更衣・源周子)	20首	2/3首	
陽成院親王二人歌合	天慶六年(943)以前	元良親王(と同母弟元平親王の二人?)	39首	2/2首	
陽成院一親王姫君達歌合	天暦二年(948) 九月十五日	陽成院	50首	0/4首	寛平中・陽成一に重出
坊城右大臣殿歌合	天暦十年(956) 八月十一日	藤原師輔	21首	1/1首	
合　計				33/131首	

【別表】
『古今和歌六帖』所収の歌合歌について、開催年月・主催者・総歌数と、『古今和歌六帖』における採歌数、さらにその中で、歌合にのみ採歌対象を求めることのできる、他出のない歌の数をまとめた。